
やっちゃまったよ。私...妖怪みたいなのを拾いました。

荒城 十晴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やつちまつたよ。私…妖怪みたいなのを拾いました。

【Nコード】

N4204Z

【作者名】

荒城 十晴

【あらすじ】

恋人に振られてやけ酒を浴びての帰り道に子犬を見つけて連れ帰ったのが運の尽き。「てめえら、とつと家から出てけ！！塩撒くぞ！妖怪共お〜！」

やっぱり王道！！美形な妖怪が住み着いた！？

「ちなみに俺は犬神なんだが」

主人公はこのまま三年行けば、処女のままアラサー突入！重度の音ゲーマニア。

「きさまらのせいで私がポップンやダンレボ、初音出来ねえだろう

「が！私の音ゲーライフ返せえ！」

運命の出会い…ケツ（前書き）

はいはい〜やりました。また新連載やり始めました。詳しい人物紹介はあとがきにてやります。

メアンリや永井さんも進んでないけどよろしくね！

運命の出会い…ケッ

「はあ、…どうせだったら処女貰ってから別れて欲しかったな…」
私、葛之葉 明日香（くずのは あすか）27歳独身OLの処女だ。

4時間前に2年前から付き合っていた男性に振られた。
社内恋愛だった。

「しっかし、やってくれるわねー。あの、ぶりっこ後輩ちゃん」

『せえんぱあい、わたしたちい、つきあうことにい、なりましたあ（はーと）』

『そうゆうことなんだ、別れてくれないか…』

私は、『…そう、いいのよ。…貴方達お似合いだから…』

「オニアイ、ねえ。はっ」

振られた後は居酒屋でがばがばとビールとつまみを飲み食いした。
今はその帰りだ。

『別れてくれないか…』

「もういいや…今夜は朝まで音ゲーするぞー!!」

今はまっているのは、長い緑髪のツインテールの女の子のゲーム。

「ロミオとシンデラでもクリアするか」

いい感じに酔っている私に見えたのはボロボロの布にくるまった何かだった。

「ん？なんだあれ？」

近付くとそれは子犬だった。

酷く衰弱していて汚れきっている。

普段の私なら見捨てるか、餌だけやってうせるかだけど……

「……………」

私はその子犬を拾った。

ただ、自分と似ていたから。

そんな理由だけだった。

鳴き声すら出さない子犬が酷く似ていたから…

「いつの世も厳しいもんだねえ。」

一人言をポツリと呟いて帰る。

ガチャッ

ただいま、と心の中で言う。

「さて、牛乳あったかな？」

しばらくして、人肌に温めた牛乳を子犬に飲ませます。

舌を出して器用に飲む。

「フフツ、おいしいか？」

明日には、飼育用グッズを買って来よう。

風呂にでも入るか…

子犬は牛乳を飲み終えてうとうとしている。

私は子犬を抱えて風呂に行く。

子犬は先に入れて、服を脱ぐ。

「いい歳してまだ処女なんて笑い物ね」

風呂に入ると子犬は嫌がって逃げようとした。

「こら、逃げるんじゃない！」

子犬を捕まえて湯を張った桶に入れてやる。

ヒンヒン鳴いているが止めない。

子犬の体をボディソープで揉みながら洗う。ちなみに私はハーブ系が好きだ。

前に見つけた柑橘系とミントがいい感じに混ぜた匂いのソープで洗う。

子犬が、フワンと変な声で鳴く。

汚れが落ちていき毛色が分かる。

クリーム色だ。目は……赤だ。

「…おまえ、アルビノか？」

子犬が固まる…が、ぎこちなく首を曲げ、「クウン？」と鳴くので笑ってしまった。

まるでこちらの言葉を理解しているようだ。

しかもアルビノは毛色が白になるはずなのでそういう犬種なんだろう。

私は余り犬種について詳しくない。目の色が青いのがいたし。いるんだろう。

風呂から上がり拭いてやる。

さて、風呂上がったし、寝るか。

布団を敷いていると、子犬は少し離れてこちらを見ている。

「今日くらい一緒に寝てもいいぞ」

尻尾を振りながらもおすおすと寄って来る。

「本当に面白いな、君は本当に犬か？」

子犬はワンと一鳴きする。

さて、明日はペットショップに行ってグッズを買いに行こうか。

【明日香 side 終わり】

【???? side より】

「この間の答えを聞きたいんだが？」

「俺は断らせてもらう！」

紺色の甚平を着た、赤い目をした青年が言う。

「おやあ？君にとって悪く無い条件だと思っただけど」

黒いスーツを着た18歳位の青年がニタリと笑う。

「俺は関係ないな！とつとと出てけ！」

「本当にか？人間を恨んでないのか？」

「それはっ…！」

「望んでいないのに寂れた村を復興するために、お前は生き埋めに

され、頭だけ出されてそのまま一週間、飢えに苦しませられ目の前に餌が有りながらも食えず過ごした一週間かけて飯の事だけが頭ん中占めた時、お前は殺されてんだよ？ 挙げ句、昔は祭られていたのに今はこんなボロい社やしうにお前はいる！」

スーツを着た青年は憎む、憤怒する。人間を。

「そうしなければ、この村は皆死に絶えたはずだ……！！！」

甚平を着た青年は苦々しく言った。

「奇麗事はもういい！！ 単刀直入に言え」

「俺は…嫌だ…」

「そうか…お前がいれば結構な戦力になってたんだかな。 犬神…俺はもう帰るよ」

スーツを着た青年が踵を返す。

「そうか…次来た時は茶位出す……があっ！！！」

甚平を着た青年の胸には刀が刺さっていた。

「済まないねえ、聞かれたからには口封じする事にしてるんだ、とはいえお前に真正面から行っても勝てっこないんで不意打ちさせて貰った」

「がっ…はあ…はあ」

甚平を着た青年は地面に膝を付きスーツを着た青年を見る。

「それじゃあな」
刀を振り上げる。

その瞬間、甚平を着た青年は地面の砂をスーツを着た青年の顔目掛け投げつける。

「っ！！目潰しか！！」

甚平を着た青年はその間に駆ける。

駆ける。駆ける。駆ける。駆ける。草木を避けて、駆ける。

疲れた頃にはボロボロになり立っていられないほどだった。
ここがどこかも分からない。

「そろそろ人化の術が解けるな……」

ぽつりと呟やく。

その2時間後、彼は一人の女に出逢い、拾われるのだが、それは先の事である。

【?????side 終わり】

運命の出会い…ケツ（後書き）

人物紹介1、

葛之葉 明日香（27）

9月12日生まれ

O型

趣味、音ゲー 中でもダンレボが特に好き。

性格、面倒くさがりの面倒見のいい姉御肌。気に入ったのにはよく面倒を見てやる。

紹介文

恋人に振られてやけ酒煽りながらの帰り道に子犬（妖怪）を連れ帰り、そこから妖怪の事情巻き込まれる。一見、妖怪から見れば弱そうだが、音ゲーで鍛え上げた運動能力や咄嗟の判断、反射神経は桁外れもいいところ。

なんか妖怪に好かれる。

最後に一言

「私の音ゲーライフ返せや。バカ妖怪共」

超絶！？人VS鬼！！…まじですか…（前書き）

結構グロくなっちゃいました。誤字誤文があってもご容赦を、あとなんか感想頂けると次に生かれますし、書く意欲が増します。よろしくね。

超絶！？人VS鬼！！…まじですか…

【????side】

「やってくれたな。…あの犬…」

めをこすりながらスーツを着た青年は呟く。

「へえ〜。旦那でも失敗することがあるんすね〜…」

青年の近くの木の上にパーカーを着た少年が聞こえる用に独り言を言う。

「見てたらあいつを追えよ」

「いや〜、俺じゃ犬神の旦那にや追いつけませんよ」

「取り押さえる位は出来たと思うんだけど？」

「だから無理ですって、力、速さ、体力、俺が相手になるのは精々力と防御が関の山ですね」

「そっか…」

「旦那だったら妖術の幻惑で迷わせること位出来たでしょうに」

「無理だよ。あいつは鼻が利く」

「あー、犬ですもんね〜」

パーカーの少年が頬を掻く。

「追え」

「あいあい、りょーかいしましたよつと」

パーカーの少年が木の枝を蹴ると空高く飛んだ。

パーカーを着た少年。彼は鬼。その22時間後、彼は一人の独女、明日香と激闘を繰り広げる事になる。

【????? side】終わり

所変わり明日香side、「いや〜、フルーツジュースが安く買えたな〜」

会社の昼休み、私はスーパーの勝利品を見ていた。

スーパーと言う名の戦場から奪い合いを制したそれは正に戦利品。

ちなみに買ったのは、桃率100%桃絞りジュース、イカのスルメ、無味無色の炭酸水、お昼の弁当。

子犬は餌と水、風呂場にトイレを置いて、家でお留守番だ。

会社の屋上で、

同僚に昨日の事を話し、食事に誘われたが断った。なぜなら、あの子に会うためだ。

「おーい、いるかー？」
ちよつと大きめな声を出す。すると、
アー、アー、と鳴き声が返つて来て、一羽のカラスが翼をはためか
せて寄つて来た。

「おお、元気にしてたか？カア坊」

名前は簡単だがまあいいかな？程度で名付けた。カア坊との出会いは3ヶ月前、屋上で昼ご飯を食べようと思ひドアを開けると地面でカラスが暴れていた。いや、片翼が血に濡れていたから、猫にでもやられたのだろうか。それと首に紐みたいなのが巻いてあり苦しげに鳴いていた。
それを助けたのが今に至る。

カア坊は聞き上手で、私の話を聞いてくれる。

「私、彼氏と別れちゃったんだ」

アー。

「どうしようかな？」

アー？

「カア坊、私ね。彼氏を盗られたんだけどね？私って、そんなに魅力がないのかな？」

アー、アー！

翼を開く、それは否定だ。

「カア坊、あんたが人だったらあんたを恋人にしたいよ……」

「なら、遠慮なくいかせて貰うぞ？」

ん？ 後ろに誰かいたかな？後ろを向く。 いない…。

「カア坊、私、病院行った方がいいのかな？」

アー？

「いつもありがとね。はい、話のお礼のおにぎりよ
いけない。もう昼休み終わる。「じゃあ、また明日ね、カア坊」

ドアを閉めるとき、

「ああ、また明日、な」

とか聞こえたけど時間が無いので気にしない。

さあ、書類を全部片すか。

いつもはアリナ ンでチャージするが、今日は子犬の事があるので
早く終わらせるためにもとっておきのユ ケルの箱入りの奴でチャ
ージする。

どんと書類の山は減って行くが今は聞きたくない奴の声がする。

「課長う、これえどうやるんですかあ？」

一気にテンションが落ち。

「えー、どれかな？」

元恋人とぶりっこ後輩がいちゃつく。

イライラ。

「えつとおく、ここなんですけどおく」

イライライライラ。

「しょうがないな」

見ないぞ。私は見ないぞ。イラついてんのに今見たら間違いなく、ぶちのめしそудだ。イライラは仕事にぶつけた方が能率が上がる筈だ。

うん、そうしよう。

結果、業務終了時間、午後7時28分。

部長が涙ながらに感謝していたけど、私そんな大層な事したか？とりあえず。スーパーの袋を持って帰る。途中、ペットショップに寄ってグッズを買う。

電車に乗って降りたときには7時57分だった。

帰り道を歩いていると、ふと違和感を感じる。

腕時計は8時をさしている。

いつもならこの時間帯は結構人がいるはずが、誰ともすれ違わない。

風が吹いて缶の転がる音が響くほど静かだ。

呆然としていると缶の転がる音が止んだと思ったら、缶の蹴る音がした。

次の瞬間、缶がこちらに飛んできた。

「っ!!」

それを避ける。

「へえ、避けれるんだ」

「誰!」

すると、パーカーを着た15位の男の子が飛んできた。飛んできた、というよりは飛び出たの方がしっくり来る。

「おっと、失礼、お嬢さん」

「27でお嬢さんなんて呼ばれる事なんて無いと思ってたわ」
そう、返すと男の子は笑いを殺すように、「くくっ、怒らないんだね」

「…怒ってるわよ。で、何のようかな?早く帰りたいんだけど?」

「いや、この辺で甚平を着た男の人知らない?」

「知らないわよ」

「じゃあ、犬は見なかった?」

なんでこんな事聞くんだろうか?

「昨日、子犬は拾ったわ」

「そう、その子犬は俺ん所だから返してくれない?」

「お断りよ。あんなボロボロにしてちゃんと面倒見てないじゃない！」すると男の子は考える仕草をする。

「んー、ま、言ってもいいでしょ」

「なによ」

「俺は鬼なんだよ」

鬼？

とらのぱんつの金棒持つてるあれ？

そんな事考えていると、男の子の拳が飛んでくる。

私はそれを避ける。

よけて正解だった。男の子の拳はコンクリートを貫通していた。

「…なに、それ…」

馬鹿力つて言う次元じゃない！

「わかったでしょう？俺は鬼なんだ。だから、子犬の場所教えてくれない？」

普通なら屈している。が、「はあ、だから、お断りって言ってんでしょ！…！」

ブレイクダンスの要領で地面をに手をついて、回し蹴りを二発くらわせる。

「なっ！ぐあっ！…！」

相手がよろめくその内に足払いをかける。案の定転倒する。

「…いつつう。やってくれるねえ…人の分際で舐めた真似してくれ
るじゃねえか!!」

よし、怒ったならこつちのもんだ。

「鬼さんこつちだ！手の鳴る方へ」

「クソがあ！粹がつてんじゃねえ!!」

振られたばつかの女舐めんじゃねえ。

舐められっぱなしは性に合わないんだ。

アパートの方に走りながら考える。鬼の弱点を。 なんかないかな

? 今あるのは、桃ジュース、スルメ、炭酸水、あと、もしもの時
用の催涙スプレー。

催涙スプレーしかないな…ん、待てよ？ 桃、鬼、餓鬼、日本神話、
黄泉平坂、よもつひらなか 打開策見つけた！

アパートの2階に階段を使って登る。よし、鬼も使ってる。逃げ道
は一つ位だ。

だから、これを使う。

プシューウウ

「目眩ましのつもりかあ？なめん…がつ、あ、ゲホ、ゲホゲホ」

催涙スプレーで時間を稼ぐ。

3階の305号室の前に確か和希君の木製バットがあった筈。バツ

トを拾い上げ、次に目指すのは、5階の507号室の前に置いてある酒井さんの日曜大工用品。そこに目指している間に炭酸水に塩を入れて思いつきり振る。ポケット塩持つてて正解だわ。鬼のいる階段とは別の階段を使う。

5階に行き大工用品を取った所でガシツと鬼に捕まれた。

「手こずらせたな！いたぶりまくって殺してやるよ！！」

「…それは、…い、いや…止めて…」

「助かりたかったら子犬の場所を吐け」

「…6階の602号室よ…」

「そうか、じゃあお前は用済みだな。…死ねよ」

「…やっぱりね」

「なんだと？」

「これでも飲んでろ！！」

一気に炭酸水の蓋を緩める。ブシッ！

勢い良く鬼の顔に炭酸水が当たる。

「ブハッ！」

よし、手が離れた。

そして逃げて目指すは屋上！

「はっ…はあはあ」

階段を一気に登る。

鬼が来る。

「まだ残ってて良かった！」
もう一度、プシューウウウ。

「来るってわかってたら、んなもんきくかよ！」
空になったスプレーを鬼に投げつけて登る。

最後の時間稼ぎはこれだ。

階段に大工用品に入っていた潤滑油を撒く。

「うおっ！がっ！」

案の定滑って落ちた。

屋上に着いた！

早く仕込んで置かなきゃ。

「ぜってーぶち殺すあのアマー！！！！」
バンっ！！ 鬼がドアを蹴破る。

「すー、はー、かかってきなさい！！！！」

てイザナギの命を追った。その餓鬼がたべるのを嫌がり逃げたのが黄泉平坂に成っていた桃だったという。

餓鬼に憑かれている人は、桃をたべると炎症が出るらしい。」

私が確信に至ったもう一つの理由が桃太郎の話だ。それで、鬼イコール桃嫌いと言う結論に至った。博打もいいところである。だが、当たっていたようだ。

「…テメエ、知ってたのかよ俺らの弱点を…」

「あてずっぽだけどね。さて、今度はこっちが攻める番だね」

「言つとくが俺らは傷だらけになってもほんのちよつとで治るぞ
!!!」

「だから、これを使う」

私がつっているのは釘バットだ。

「知ってる？釘バットってよくマンガで見るけど、本当にやると肉に食い込んでトンカチで打つ部分が釣り針の返しみたいになって抜けないらしいの」

「っ!!!やめっ!!!」

「…だから、貴方にはちよつといいでしょ!!!」

そこからは、あまりに凄惨な、一方的ないたぶりだった。

抵抗出来ない相手に殴る。血が肉が見えていた。痛みに悶え苦しん

でいる相手にただ殴りつける。

なぜか、涙が出た。。

一瞬かもしれない。でも私に取って永遠に感じた時間だった。

一見桃太郎は正しいのかもしれない。

だけど、自分たちと違うと言うだけで迫害されて。自分たちと違う未知のものが悪だと決め付けられて。

そんなひねくれた見方も出来る。

やがて、鬼は抵抗を止めた。

「…もう、殺せよ。なんでお前が泣いてんだよ…」

虚ろな目で見て言う。

私はバットを力無く捨てた。

そして、血だらけになった少年を抱きしめた。何故そんなことをしたか、自分でも分からない。でもそうするほうが良かったと思う。

「帰ろっつ、止めよっ、おいでっ」

涙しながら、抱きしめる力を強くしながら少年に言った。

「なんでだよ！！俺はお前を殺そうとしたんだよ！？なんでっ！！
なんでなんだよお…」

少年も泣く。先ほどの事から学んだのは、戦いの無情さ。

儂さ。不毛な命の奪い合い。

少年は私の胸でむせび泣いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4204z/>

やっちゃったよ。私...妖怪みたいなのを拾いました。

2011年12月16日01時49分発行